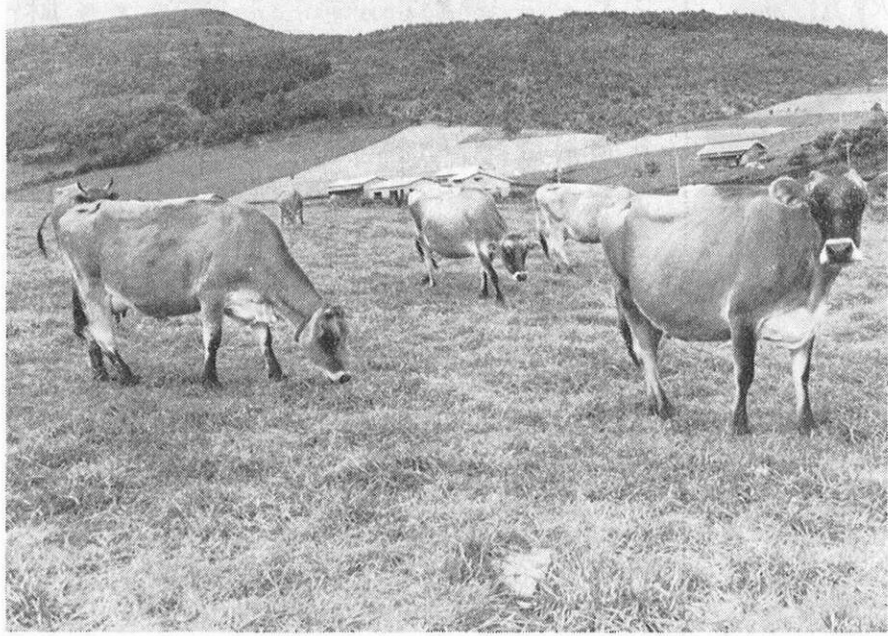


火の山とあか牛とスギと

★ 地域開発の指標
阿蘇地区



酪農は阿蘇の産業の大きなポイントだ (小国町麻生釣牧場のジャージー乳牛)

阿蘇地域は、九州のほぼ中央部、県の北東部に位置し、北部・東部を大分県に接し、郡の南東部は宮崎県と境している。なお、西部は菊池・上益城の両郡に面している。

地形的には、海拔一、五九二呎の阿蘇高岳を有する広大なカルデラからなり、いまなお噴煙あがる中岳(約一、五〇〇呎)・根子岳(一、四〇八呎)・烏帽子岳(一、三三七呎)・杵島岳(一、三二一呎)の阿蘇五岳を中心とし、世界一の規模を誇る外輪山は、その周囲約二二八呎、東西約一七呎、南北約二四呎で、火口原は黒川の流れる北の阿蘇谷、白川の流れる南郷谷に分かれ、北阿蘇外輪山の小国地区と産山・波野・高森(除く旧高森・色見)・蘇陽の山東部および西裾野から形成されている。

開発の方向

郡の面積は、一、一九七・〇平方呎、総人口は、四十年国勢調査時点で一〇万二、五五二人である。県全体に対して面積で一六・三％と球磨郡(一八％)について広く、人口で五・七％を占め、人口密度は一平方呎当り八五・七人で県平均二四〇・二人の約三分の一に過ぎない。阿蘇の主な産業は、米を基幹とした穀作、天守の大原野を利用した畜産および高冷地を菜などの農業と、年間平均気温

約一三度、年間降雨量二、〇〇〇呎以上という恵まれた自然条件によって古くから美林を誇る林業、それに、ますます躍進が期待される観光産業である。しかしながら、阿蘇地域は、阿蘇山を中心とした平均標高六〇〇呎〜八〇〇呎の高原地帯であり、
①地形的には外界と遮断され、
②土じょう的にはせき悪な火山灰土じょうで蔽われ、
③気象的には高冷多雨で冷害、霜害、風害、雨害、ヨナ害と各種災害が多く、

このため産業の振興上幾多の困難があった。

昭和九年に阿蘇国立公園地域の指定を受けたが、今次大戦中は、治山治水事業は全く放置され、造林事業などは不振で濫伐がくり返され、文字通り山河は荒廃に帰っていたのである。

戦後、未開発地域の開発が切実な問題となるにつれて、国、県の着目するところとなり、総合的に開発する機運が高まってきた。

すなわち、昭和二十三年、阿蘇特定地域総合開発促進会および阿蘇総合開発促進期成会が熊本・大分両県にそれぞれ結成され、県議会の開発促進決議、阿蘇総合開発委員会の設置など、燃えあがる開発意欲のもとに、翌二十四年二月、農林省総合開発四地域の一つに、また建設省総合開発一〇地域の一つに指定された。

その後、昭和二十五年六月、国土総合開発法が施行されるに及んで、二十六年十二月には法に基づく特定地として「阿蘇総合開発地域」が、全国の激しい指定争いのなかから誕生した。現在、最も脚光を浴び今後の開発のホープと目されている畜産と観光事業もこの計画にとり入れられたが、計画の重点としては「農産開発」ならびに「国土保全、災害防除」の二大目標が緊急の課題として取りあげられた。

ところが、たまたま正式にこの計画書を国に提出する運びとなった昭和二十八

年六月、集中豪雨に襲われ、阿蘇地方は無数の崖くづれと山津波を起し、下流の熊本市は白川によって阿蘇から運ばれたヨナに埋まるという「六・二六大災害」に逢着した。

これを機会に、特に国土保全事業が大きくとりあげられ、昭和二十九年閣議決定になった開発計画の基本方針も「地域内における国土保全と土地の高度利用による生産の増強と安定をはかることにおく。」とされ、開発計画達成期間は、その目標を概ね一〇カ年(昭二十八〜昭三十)と、いうことで発足した。

構造改善で新しい農村づくり...

町村別に眺めてみると、小国町が三十七年度〜三十九年度に、牛乳・肉牛を基幹作目にあげ、第一次事業(補助事業費五、九〇〇万円)のスタートをきり、現在第二次事業を進めている。

産山村は三十九年度〜四十二年度を事業期間として、補助事業費五、六〇〇万円を投じ、養蚕・肉牛・乳牛の選択的拡大に努め、高森町では、四十年から三カ年で補助事業費八、三〇〇万円を計上し、そ菜・肉牛・くりを、また、久木野村は四十一年度から四十三年度に補助事業費六、一〇〇万円を計上し、畑地開田による水稲栽培・肉牛をそれぞれ基幹作目とし、主産地形成と自立経営への道を

くなくなったので、改訂計画を作成し、国に要望したと認められなかった。

さらに昭和三十四年四月、九州地方開発促進法が施行されるに至り、阿蘇・久住・高千穂の未開発地帯は、九州開発の一環として大きくクローズ・アップされてきた。さらに、昭和三十九年十月には、別府〜阿蘇を結び海抜一、〇〇〇呎の高原地帯を走る九州横断道路「やまなみハイウェイ」も開通し、阿蘇地域はあらたな発展の契機を迎えたのである。

以上は、これまでの阿蘇総合開発の主な経緯であるが、年次的には、二十四年〜二十八年の五カ年を模索期(計画作成

急いでいる。

以上の地域以外では、阿蘇町・西原村が四十二年度から計画地域の指定を受け、大規模草地改良による畜産・米・養蚕事業を予定している。残る六カ町村(蘇陽町・一の宮町・白水村・南小国村・波野村・長陽村)は、農協合併・実施地区・他の関連事業との関係等の理由でまだ緒についていない現状にあるが、農林省との予備協議も終え、実働の時期を待っている。

構造改善事業の効果

圃場整備の結果によって、水稲の一割を越える増収など、その成果には見るべ

期)、二十九年〜三十三年を国土保全期、三十四年〜三十九年を畜産・道路期に分けることができよう。

このような経緯をへて、阿蘇地域は戦争による荒廃、未曾有の大災害、経済状況の変化に伴う事業計画の変更問題などの障害を乗り越え、画期的な事業の成果と所産をのこしてきた。しかし阿蘇固有の大自然と産業との調和、また最近とみにみられる都市周辺の商工業の発展による辺地問題の発生など阿蘇地域はまだいろいろな問題をかかえており、強力な振興施策が強調されることである。

きものがある。小国(三共牧場・農協経営)においては、草地造成によって搾乳牧場を設置し、牧野の高度利用による多頭飼育(現在ジャージー乳牛一〇五頭、うち搾乳牛八〇頭、肉牛三〇頭、計一三五頭)と省力経営による牧場建設に成功し、第三回(昭和三十九年)農業祭で天皇杯を受賞した。

産山村では集団桑園造成による養蚕経営で粗収入一〇〇万円農家も生まれる程の成果をおさめ、ますます期待がかけられている。また、久木野村では、河川改修をほぼ終った白川から支線水路を利用して、畑地開田に成功、今年秋には水稲一〇畝の収穫をみるに至った。計画では